第６７回公開シンポジウム

就学前の親子の支援について考える

◆プレゼンター　山　縣　文　治
大阪市立大学生活科学部人間福祉学科教授 / 子ども家庭福祉

◆パネリスト　赤　西　雅　之
甲南女子大学総合子ども学科教授 / 保育学

◆司　　会　一　色　伸　夫
甲南女子大学総合子ども学科教授 / 子どもメディア学

一色：それでは、第 67 回子ども学講演会を始めます。本日は「就学前の親子の支援について考える」というテーマでお二人の先生からいろいろなお話をしていただこうと思います。児童福祉法が昭和 23 年に施行されてから、以来度々改正されてきており、市町村が本格的に地域の子育て支援に取り組む時代になって参りました。従来は、子育て支援は、私事と考えられてきましたが、地域や行政が関わることになってきたのは、どういう理由があったからか、また、どのような関わり方が求められているのか。そのようなところから現代の親子の様子について考えていきたいと思います。

今日、基調講演していただきますのは、山縣文治先生です。山縣先生は、大阪市立大学生活科学部人間福祉学科の教授で、子ども家庭福祉をご専門に研究されています。養護、児童問題に関する研究、保育、地域子育て支援に関する研究、子ども家庭福祉論の理論的構築など、とても幅広く子どもと親、地域を研究する中で、子育て支援についてもご研究、実践もされている先生です。先生のホームページに先生が書かれたメッセージがありますので、ご紹介します。「はな垂れ小僧」であることが許されなくなった子ども、次代を担うことをやたらと強調される子ども。そんな子どもたちに、改めて子ども期を楽しんでもらえる社会、それに付き合う親も楽しめる社会のあり方を考えています。「子どもは大人になるために生まれてきたわけではない。子どもは、子ども自身であることを楽しむために生まれてきたのだ」。

では、山縣先生よろしくお願いいたします。

山縣：皆さん、こんにちは。今から皆さんと一緒に就学前の子どもについて一緒に考えていきたいと思います。今、一色先生からご紹介いただきましたが、緊張せずに聞いてください。

身体を動かしながらいきましょう。最初、ちょっと立ち上がってください。指を一本お腹の前の辺りに出してください。それから前後左右、誰かと２人３人になって、指先が見える関係になってください。その指をゆっくり時計回りに回してください。相手の人の指はどちらに回っていますか。逆回り、左回りに回っています。では、私としましょう。前を向いて同じように右回りに回してください。そのまま天井に

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

回していってください。どちらに回っていますか。右ですね。では、そのままゆっくり肘をまっすぐ床に下ろす感じで腰の辺りまで回してください。右に回してください。もう一度しましょう。天井に指を置いて右回りに回してください。そのままゆっくり肘を床の方に回転を変えずに回しください。はい、では、着席してください。答えが分かった人。最初やっていたのがヒントです。向かいの人は左に回っていると言っていましたね。あなたはどちらに回していましたか。

学生：右回りです。

山縣：これが答えです。向かいの人ですから左というのは当たり前ですね。自分の中に他人が出てきた途端におかしくなりました。自分の中にもう一人のあなたがいるのです。どこかで見え方が変わったのです。どこで変わったのでしょうか。

学生：目

山縣：そうです。目の位置から下がった途端に、指先から向こうを見ている感じになります。目線、視点が変わると逆に見えることがある。

いろいろな子育ての仕方があります。いろいろな流派があります。例えば、私は虐待の関係の仕事もしていますが、虐待をしているお母さん、お父さんだって、最初から子どもを悪くしようと思って虐待しているお母さん、お父さんはいないです。子どもをよくしたいと思った結果、叩くしかなかった。それしかわからなかった。ちょっとしたところで変わってしまったのです。

今日は、違う立場のお話がたくさんでてくると思いますが、そういう見方もあるのかということを時々感じて欲しいと思っています。

少子高齢化の社会を実感してみましょうということですか。数字で考えてみます。日本中の0歳児人口、今1年間で生まれている赤ちゃんの数は何人ぐらいでしょうか。

学生：100万人ぐらいですか。

山縣：すばらしい。106万人です。では、次の質問です。106万人と同じぐらいの年齢の人というのは、何歳ぐらいでしょうか。

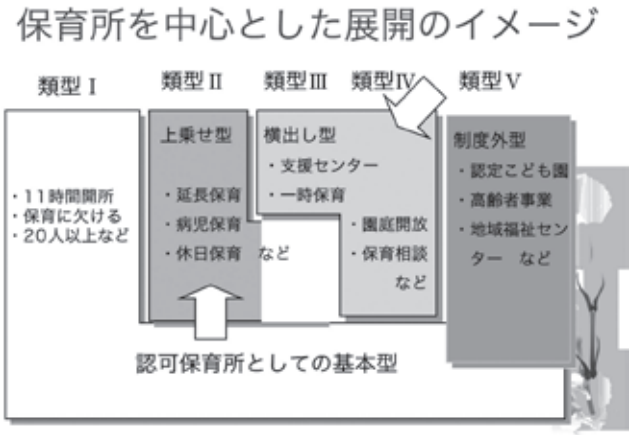
学生：80歳ぐらいだと思います。

山縣：80歳が一緒だったら、日本はパンクしています。恐らく高齢化率が40%ぐらいになっています。それでも今77歳です。77歳の人が107万人いるのです。赤ちゃんの数と80歳に近い人たちの数が同じという社会がやってきています。結構大変なことです。今、政権が代わり、新しい仕組みに変えよう

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

としていますが、それにしても、大変な状況になってきています。

レジュメに戻ります。１番「保育所が歩んできた道」とあります。今から絵を描いていきます。就学前の子どもたちが行く主な場所は、保育所と幼稚園です。幼稚園は、100 年以上の歴史があります。保育所は、国の制度でいうと、60 年ぐらいの歴史です。実践の歴史でいうと、100 年近い歴史があります。国が保育所を認めたのは、児童福祉法の時が初めてですから、60 年ぐらいの歴史になります。明治時代にも保育所はありました。でもそれは、国が保育所とは認めていませんでした。しかし、今、勢いは保育所の方にあります。流れはどんどん保育所の方にきています。ということで、どういう歩みをしてきたのかを簡単に絵に描いて見ました。



パワーポイントの都合上、では、先に２番に進んでいきます。また、皆さん立ってください。「もしかしてかもしかかも」という言葉が面白かったので並べてみました。カモシカの頭を表現してみてください。前半分の人たちは、後ろを向いていただいて、半分の人たちがどのような格好をしているか見てください。カモシカはどんな頭をしているでしょうか。もっと大胆にやってみてください。２派に分かれたかもしれません。多数派は、手を広げたりして、そこそこの人数の人たちが、角のようなものを生やしています。カモシカと言えば、女性にまつわる言葉あります。「カモシカのような足」と言います。この方は、どなたでしょうか。トナカイです。皆さんは、トナカイの頭をしていませんでしたか。狼、野犬、違います。これは、何でしょう。これはカモシカです。結構立派な足をしています。カモシカのような足になりたいですか。実際に足は細いらしいですが、見た目は太いです。では、なぜ、皆このような格好をしたのでしょうか。「鹿」という言葉に引かれた人がきっと多いと思います。なぜか。それは、カモシカを見たことがないからです。カモシカを見たことがないから鹿で想像しました。

では、ニワトリの絵を描いてください。保育士さん、幼稚園教諭の先生になるのですから、ニワトリぐらいは描きましょう。さすが、保育士、幼稚園教諭を目指す人たちです。皆さん上手に描けています。正面から描いています。すごいですね。この辺りの学生さんに聞きますが、向こうの方からニワトリを一羽仕入れてきました。何か怪しげなところがありますか。足が４本あります。足を４本描いた人、他にもいますか。先程のカモシカと同じです。最近ニワトリを見たことがありません。ニワトリ、鳥、動

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

物、となると４本のイメージがあります。何が言いたいか。見たこと、経験したことがないことは、知識、頭から引っ張ってこようとする。

子育てでいうと、育児書から引っ張りだそうとする。身近に子どもたちを見たことがない、子育てを見たことがなくなってくると、情報を育児書から知ろうとする。大学の先生、お医者さんが書かれた本から引っ張りだそうとする。でも、そこに出てくるような子どもは、あなたの子どもとは絶対に違います。一場面だけをとると、正確なところもあるでしょうが、24 時間を見ると、恐らく違います。そうすると混乱する。これが２番に書いてあります。子育てを身近に見たり、経験したりする機会が減少したことによって、子どもが育つということの実感が湧かなくなってきている。情報がたくさんでてきて、訳がわからなくなってきたという話です。子ども、赤ちゃんが泣いていたら、お母さんはどうすればいいですか。抱きかかえる、あやします。

赤ちゃんが泣いています。なぜ泣いていますか。わかりますか。

学生：お腹がすいて泣いている。

学生：おしめが濡れている。

学生：甘えたいと思っている。

学生：寂しくて泣いている。

学生：眠くて泣いている。

山縣：泣いたらあやしましょうという情報は入っています。泣いている。あやさないといけない。眠たい子どもをあやします。どうなりますでしょうか。多分、もっと泣くでしょう。寝れなくて泣いているのに、お母さんは、あやしても効果がないので、もっとあやします。最後はどうするか。一生懸命赤ちゃんを振ります。これは、シェイキング・ベイビー、日本語では、揺さぶり症候群、揺さぶられ症候群、子どもの虐待となります。でも、お母さんは、あやしているのです。泣いていたらあやすようにと書いてあるので、一生懸命あやしているのです。このお母さんを責められますか。なぜ泣いている子どもを、あやしていけないのか。今お母さん、お父さんたちの子育ての難しさはいろいろなところから出てきている。

そのように、子育ての状況が変化している中で、保育所がこれに合わせなければならなくなったという形で説明をしていきます。保育所には、認可保育所としての基本形があります。保育所であるために、国がいろいろな要件を定めています。例えば、保育所は 11 時間開けておく、定員は最低で 20 名などありますが、他にも、面積や職員配置などいろいろな要件があります。

２つ目は、矢印が下から上がってきています。そして上乗せ型と書いてあります。認可保育所を利用している家庭に対して、プラスアルファして、もう少し何かしてあげたい、もう少し子どもの育ちを支援

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

してあげたいので、今世の中で保育所がやっているのは、延長保育、病児病後児保育、休日保育などいろいろなものをやっておられます。

３つ目、今度は、矢印が変なところから来ました。ここから入って来ていない。普通日常的には、保育所を利用していない人たちに対して何かすることです。横出しと書きました。例えば、地域子育て支援拠点事業のセンター型、一時保育、園庭開放、保育相談など、基本を利用していない人たちに対して、いろいろな支援をするようになってきました。これが、先程の地域向けに働いているということです。日常は利用せずとも、子育てが難しくなった、情報の整理が難しくなった、そういう人たちに対して、いろいろな関わりをしていく。公園が安全でないから、保育園の庭で遊びましょうなどいろいろなことをやっています。

最後ですが、保育制度から見たら、やや類型が違うもの、めり込んでいるのが特徴です。こういう基本が出来づらくなった、子どもが減ってきて将来が危ない、もう少し多角的な事業展開をしたいというところが、保育制度とは違うものを持ち込んでやるようになってきています。これは既に制度化されていますから、本当は、制度内なのですが、保育所からみたら、幼稚園事業、幼児教育事業をめり込むことになりますので、認定子ども園をここに書いています。いろいろなものをしています。本日言いたいのは、今まで保育所の充実というのは、この基本にプラス、この青枠をやっていたら保育所はいいのだと考えていたのですが、最近は、この緑の枠、この枠が非常に重要になってきているということです。

少し、データを考えてみましょう。お母さんは何を望んでいるか。厚生労働省の調査です。1から８までは、要約したものですが、一つひとつについて必要である、必要でないで調査をしました。調査対象は、小学校に入る前の子どもたちを持っているお母さんたちです。必要であるが高いと思うものを2つ、必要が低いというものを2つ選んでみてください。選んだら、隣の人と話し合ってみてください。ここにあるリフレッシュはお母さんが息抜きしたい、映画を見たい、その間子どもを預かって欲しいというようなことです。
では、高そうなのを教えてください。

学生： ４番です。５番です。

学生： ３番。

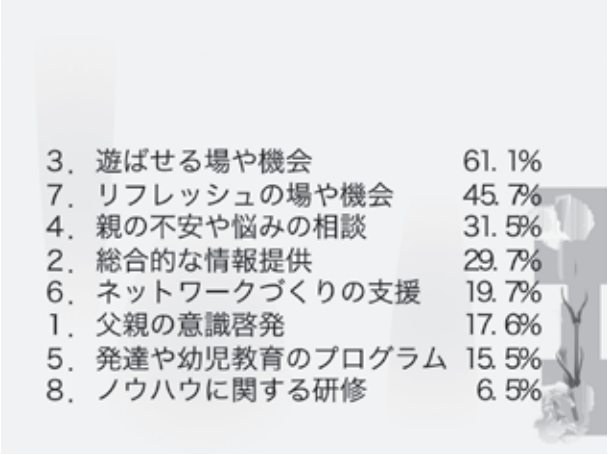
山縣： では、低そうなものを聞いてみましょう。低そうなのは、何番ですか。

学生： ５番。

山縣： 発達や幼児教育のプログラムの提供ですか。皆さんは、大学でこれを勉強しているのじゃないのですか。大丈夫ですか。

学生： ８番。

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.



山縣： ８番、子育てのノウハウに関する研修。これも、保育士、幼稚園教諭がやりたいものでしょう。では、正解です。

３番が高いです。５,８は低いです。相談も高い方です。皆さん正解です。お母さんたちの気持ちに寄り添っています。６番が抜けていますね。下の方の６、１、５はだいたい一緒です。８が低い。

では、この調査結果に見出しをつけようと思います。高い方の答えを見て、つけた見出しは、「今すぐ私を楽にさせて」です。

低い方の６、１、５、８これをセットでつけるのは、難しいです。６、１と５、８が内容が違います。６、１は、似通っています。恐らく、３、７の裏側です。「今すぐ私を楽にさせて」の３、７に対して、低い方の６、１に見出しをつけるとすると「いつ効果があるかわからないようなことは後回しでもいいわよ」です。ネットワークは中々効果が上がりません。お父さんの啓発についてもそうです。５年後に効果があるものは、今のお母さんには、役立ちません。今が大変なのです。子どもが小学生に入ってからではなくて、今、２歳の時に支援が欲しいのです。５年後に出来上がるのでは駄目なのです。

５、８に着目するとどうなるか。これは、少し難しいです。「私の子育てが下手だというの」もしくは、「私にまだやれというの」。一生懸命やっているのに、まだ私がやらないといけないのかというのが、５、８辺りの根のところにある気持ちだと思います。

今、お母さんたちがこのような状況に置かれているのを理解してあげましょう。理解することとその通りにすることは違います。理解してあげないと駄目です。しかし、この通りにすると、世の中はうまくいかないと思います。３、７これは、企業がすればいい話かもしれません。税金を使って専門家がするのは、恐らく、３、７を入口にして、６、１、５、８をどうそこに組み込んでいくのか。皆さんがプロになって、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭になった時に、今の気持ちを受け止めなければ、そこは頷いてあげなければ駄目です。

「お母さんのリフレッシュの前に、まずは、子どもでしょう」という言い方をすると、「この先生は、私の気持ちがわかってくれていない」となります。「そうよね」としっかり頷いてあげるところからスタートして、時間をかけて、いかに下に持っていくかがプロとして求められるのではないか。気持ちを理解す

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

ることと、その通りにするのは違う。気持ちを理解し、その気持ちを入口にして、自分たちが持っている子育ての理念、保育の理念、教育の理念を展開していかなければならないと思っています。

では、このような思いを持っているのは、保育園に行くとなくなるのではないかなどいろいろなことがあるでしょう。次に移りますが、平日の昼間の所属の表がありますが、この空欄を埋めましょう。平日の昼間の所属場所、保育所、幼稚園、それ以外とあります。保育所、幼稚園は、すべて国が認めているものです。保育所の場合はいろいろな利用形態がありますが、この場合は、文部科学省、厚生労働省が、幼稚園、保育所と認めているところに、認められている形で来ている子どもたちと考えてください。就学前全体、３歳未満児をみたらどれぐらいの割合に分かれているでしょうか。100% をその３つに分けてください。下の真ん中は、０になります。幼稚園は、２歳児幼稚園はありませんから、0 になります。下は、保育所にどれだけ来ているか、上側は全部で見た時にどう分かれているでしょうか。どこが一番多いのか。日本の全体の数字を想像してみてください。まず、書き込んで、隣の人と見せ合ってください。

	保育所	幼稚園	それ以外	計
就学前全体 0～5歳)	32%	25%	43%	100%
3歳未満児 0・1・2歳)	20%	0%	80%	100%

では、聞いてみましょう。上側の一番多いのはどこだと思いますか。保育所、幼稚園、それ以外でしょうか。実は、それ以外が一番多いのです。、保育所や幼稚園に行っていたら、それは親が選んだのですから、通っている子どもたちに対しては、「相談にのってあげてくださいね。情報提供もよろしくね。しんどそうだったら、児童相談所や市町村にも教えてくださいね」ということになります。でもそれ以外の人たちは、誰が窓口になっているのか、どこに行けばいいのかということです。

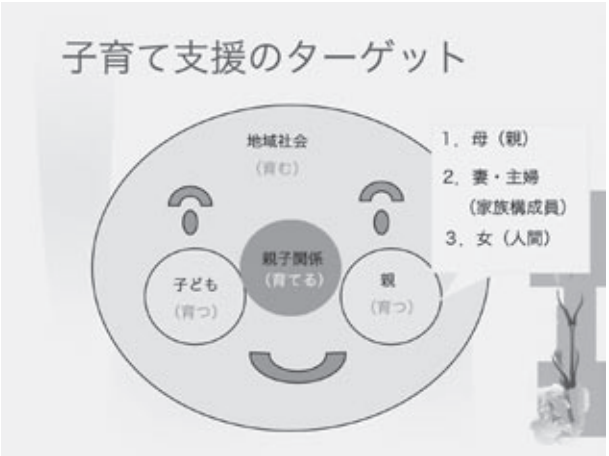
それ以外というのは、一体どこでしょうか。赤ちゃんは主にどこにいますか。家、それ以外というのは、ほとんどは家です。今日の私のテーマで言うと、家というよりは、できれば地域と言いたいです。地域にいるのです。先ほどの結果は、そこの親子の悲鳴なのです。その親子の中でニコニコとやっていればいいのですが、どうもよくない人たちが出てきた。24 時間 365 日大変なのではなくて、何かがあって今日だけ大変ということもあります。３歳未満の８割弱は、地域にいる。その親子に対する支援が必要である。もう少し丁寧に言うと、３歳未満のところの 80% 層に対しての支援が必要であるのです。ここが今、私が強調しているところです。さらに言うと、私の子育て支援論とは、３歳未満児ではなくて、マイナス１歳からの子育て支援と呼んでいます。マイナス１歳とは何でしょうか。妊婦です。妊婦さんか

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

らの子育て支援が必要である。赤ちゃんを抱えているお母さんのところから視野にいれた活動、就学前の支援は、そこまで求められてくるようになっています。その人たちが地域とどうつながっていくのかが非常に重要になります。

では、子育て支援とは、何をするのでしょうか。子育て支援のターゲットですが、これも絵を描いていきます。子育て支援のターゲットは、その1つは、子どもを対象にしていますから、子ども自身に向かう活動というのがあります。２つ目は、子育て支援の活動の多くは、実は親に向かっています。保育所は、来てもらいますから、子どもに向かいますが、地域というのは、親も一緒に関わっていくのが大前提になります。この親の中に３のパートがあります。別に女性が子育てしろということで母と書いてあるわけではありません。たくさん出てくるので敢えて母と書いています。共通で言うと、父親も含む親になります。２つ目のパートは妻とか主婦というパートを女性は担わないといけない。共通で言うと、家族構成員として、掃除、洗濯、炊事、買い物などの仕事をこなさないといけない。今度は、女と書いています。共通で言うと、人間ということです。子どもがあって親、家庭を持って妻、子どもがいなくても、家庭がなくても、あなたが一人の人間として意味、価値がある。そのことを支援していく。子育て支援の中では、親というのは、親であるけれども、実はこの３つのパートになっている人だという見方をしてあげないといけないのではないか。その３つのパートに響く支援活動。一つの団体が全部やりましょうというつもりもありません。地域の中でこのようなことができるグループが、仲間を組むことが、第一段階であるのではないか。そうはいっても中心は子育て支援ですから、親子関係が重要になります。

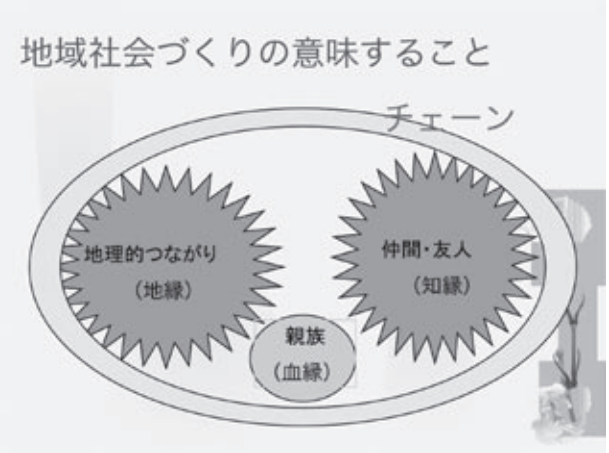
４つ目のターゲットですが、そのような地域社会との関係を考えていくことになります。いつまでも親子を抱えていくわけにはいきません。やがてその人たちが、地域の中で一人で生きていく力が目標になると思っています。育つ子ども、親としての育ちを図っていく。育てる関係、これは一方的な関係ではありません。子どもが親を育てることもあります。育ち合い、育て合い、双方向の育てるという関係。地域社会も置きたいので置いてみました。育む環境ではないか、そのような親子が育ってそのような環境を作っていく、これが重要なのではないか。



私は子育て支援は最終的な地域づくりだと思っています。そこに向かって目標を持っていく。それは

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

決して保育所が悪いということではなくて、やがてその人たちは、保育所から離れて生きていくのだから、地域を基盤にいろいろな資源と結びついていく、そのような力を持っていかないといけないということです。では、地域づくりとは何でしょうか。これは、人間は、３つの縁で生きていると思っています。１つは、親族、血縁という縁、それから地理的なつながり、地縁というつながりです。最近の若いお母さんお父さんには、この地域とのつながりを得意にしていない人がいます。そのような人でも、仲間、友人とは付き合っています。これを地縁と呼びましょう。土地の縁と知り合いの縁が昔は一緒だったのですが、それが最近分離している。知り合いは知り合い、土地は土地、でも地域で生きていくためには、もう一度これを結びつけないといけないだろう。地縁と知縁をもう一度結びつけよう。何で結びつけるのか。チェーンに結びましょう。子育て支援の仕事は、チェーンの仕事です。土地の縁、地域の人たちと親子の仲間を結び付けていく仕事、このような仕事をしていかないといけない。保育士や幼稚園教諭や小学校教諭にも共通に求められているのではないかと感じています。時間が参りましたので、これで終わりにいたします。



一色：山縣先生、どうもありがとうございました。視点が変わると見方が変わってくるという、子育て支援の時にもいろいろな見方があるということから始まりまして、なぜ地域で子育て支援が必要なのかということで、お話していただきました。では、これから赤西先生に、実際に保育所の現場で、いろいろとあるケースについてお話していただきます。

赤西：山縣先生のお話は、とても楽しかったです。こんな授業をしないといけないと思いながら伺っていました。

子育て支援の必要性は、先程のパーセントを含めていろいろなところで説明していただき、特に、主たる保育者は母親ですので、母親は妻にもならないといけないし、人間にもならないといけないし、忙しい。そして期待も大きい。でも必要なことだというお話を伺いました。実際に今、国は、いろいろなところで、就学前の子どもたちと親の支援をしています。例えば、児童館、今度 12 月 10 日に東灘区の児童館と総合子ども学科の２年生とのコラボレーションなどありますが、０歳から５歳までの親子、約

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

250 組・500 人来ます。すごい数です。実際は、支援を続けていまして、例えば親子で来て、皆で絵本の読み聞かせの教室をしましょうとか、親子で料理教室をしましょうとか、親子で体操教室をしましょうなどいろいろなことを一緒にしましょうと、ここ 10 年ほどの間でずいぶんと広がっています。親子を孤立化させてはいけない。マンションで孤立化させて幼児虐待になってはいけないということで、どんどんと町に親子を出そうと進めています。これ自体は、とてもいいことだと思います。ところが政策と現実というのは、結構違うのです。現実ではどうなっているか。実際はそれに出てきて、とても楽しいのだけれども、帰ってからの親と子どもが向き合った時に助けになっているかというと、やはり孤立化状態は変わらない。これだけ親と子が出てきて子育てについて話し合って、そしていろいろなものを作って楽しい機会を持ち共通体験を分かち合うことが、以前に比べて増えてきたにも関わらず、幼児虐待の数は減らない。むしろひどくなっている。ということは、やはりどこか足りないものがあるみたいです。私が現場で見ているには、このような子育てサークルなどいろいろありますが、決定的に足りないものは、やはり私の中では、指導者だと思います。子どもを持った親がどう振る舞ったらいいのかの指導をする人があまりにも少ない。例えば、皆が集まってきて、親子体操教室をします、料理教室をしますというのは、一つの共通テーマですから楽しいのです。ところがそのインターバルの時間、説明の時間などに子どもが走り回っていたら、「ちょっと、そこの子ども！お母さん！今は走りまわったら危ないでしょ」と誰も教えないのです。親が勝手に喋っていて、子どもが影になって見えない。そこで「立って喋っていたら子どもの邪魔ですから、座りなさい。喋るのは、ルール違反です。今は喋るのを止めてください」と誰も教えない。親御さんたちは、結構自分たちが好き放題、子どもたちも好き放題で、料理教室、読み聞かせ教室のいいとこ取りの課題はこなしていきます。でも本当に大切なのは、子どもを抱えていたらそのヒールの高い靴は駄目でしょうと教えることです。それを誰かが言わなければいけません。その指導者がいないのです。挨拶の仕方を教えましょうと言いながら、親が挨拶をしない。これではいけません。保育園でお箸を使えるようにしてくださいと言ってくるので、「保育園ではがんばっていますよ、お家ではどうですか」と聞くと、「家では面倒だからスプーンでいいのです」これは、違います。家庭でも保育園でも共通してできること、これはしなければなりません。皆が集まったら喋り方も座り方も立ち方もルールがあります。子どもを連れていたらこうなのだということを誰が教えるか、身近な躾の伝達形式がない。昔は、子育てが終わった方たちが、若い人たちに教えていたのです。今もお年寄りの方がたくさんいらっしゃいますが、世代間交流という企画を持っても、昔の遊びを教えてくださいぐらいで、そうではなくて、子育てにおいての社会との接点の持ち方の通過儀礼みたいなことをきちんと伝えていくということが、だんだんと薄くなってきています。それについては、いくつか理由があります。一つは、若い人たちが、自己主張、自己責任、自己実現など、私が主張すること、私ががんばることが自分を表現するみたいなことが少し偏って行き過ぎているところがあるかと思います。たとえば、保育園の前で車を止めると危ないので、以前は、「そこに車を止めては駄目です」と注意をすると、親御さんは、窓を開けて「すみません、園長先生、ちょっと急いでいたので、すぐにどかせます」と言っていましたが、今は違います。「そこに車を止めると危ないですよ」と言うと、ドアを開けて降りてきて、私の前まで来て、「私だけじゃないでしょ。なぜ、私に言うのですか」と怒られます。するとこちらは、おっしゃる通りなので、謝るし

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

かない。すると、「なぜ私だけ」とぶつぶつ言いながらどけてくださいます。ある意味では、きちんと自分の主張をする立派なことだと思うし、正しい、間違ったことではないのですが、こんなことをそれはちょっとまずいでしょうと、考えられなくなっています。ルールについては、これは、家庭の中の最小単位の中で、家族の中で教え合うこと。これは、外に出て大きな社会単位の中で教わること。こんなことのけじめやそのような躾の範囲が、ずいぶんとわかりにくくなってきました。

だから、最近思うことは、国は、いろいろなことで子育て支援を言い、予算を取り、いろいろな政策を保育園、児童館を中心にやっていますが、本当に必要でやっていただきたいこと、やっていかねばならないことは、まだ届いていないと思います。やはり、我々年配者も言わなければならないと思います。我々大人が責任を持って若い親子を導くそういった指導者をもっと増やしていかなければならないのではないかと今、お話を伺って思いました。

それから、先生のお話の中のデータの中で、父親の意識の啓発が一番最後になっていて、人気がありませんでしたが、これは、ちょっと違う、もっと関心を持たなければならないと思いました。家族が関心を持つというよりは、社会が関心を持たねばなりません。特に企業体などが取り組んでいかなければならないので、一筋縄ではいかないと思いますが、父親の子育てに対する意識は、もっと啓発されてしかるべきだし、これはまだまだこれから開拓の余地があると考えています。

一色：どうもありがとうございました。山縣先生がお話になったことについて実際の現場ではどうなっているのかという具体的なお話でした。そういう具体的な問題に対して、山縣先生はどのように解決していけばいいとお思いですか。

山縣：最初に赤西先生が言われた、指導者については、基本的には同感なのですが、指導者の姿勢が重要だと思います。どういう指導者がよくて、上から下に指導するような関係のタイプのものは、中々お母さんたちは、受け入れ難い。同じ目線で、まず、お母さんお父さんたちが置かれている状況に共感をしてくれる指導者でないとだめです。地域の保護者は、保育園のように、拠点をもって、日常的に行かざるを得ないわけではありません。保育園を日常的に利用している保護者に対しては、指導的な関わりもある程度通じていくと思うのですが、地域の人たちは、嫌であれば園庭解放を求めて保育園に行く必要はないのです。まず、行きたいと思える視線、まなざしが常に届いているかどうか。その中で一定の信頼関係をまず作る必要があります。そこから先は赤西先生と全く同じ考え方です。

学生さんに尋ねますが、今自分で複数のグループに関わっていますか。それとあなたは、嫌いな人とも折り合いをつけて付き合うことができますか。折り合いをつけて生きることができる人が今、とても減っています。ところが、生きていくということは、嫌いな人とも、そこそこ付き合っていくしかないです。しかし、嫌いな人とは付き合わなくていい。だからどんどんと小グループ化していく。大学でいうと、正式なクラブ活動ができなくて、同好会みたいなものしか成立しなくなる。それと一緒で、拒否できるものについて、関わっていく時に難しさを感じています。

このような状況になると、指導型の先生は、中々受け入れられない。そうするとピア・ピアグループ

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

あるいは、セルフヘルプグループのような、同じような問題を抱えている人たちが支え、支えあっていくという関係が重要になってきます。一方的に、常に指導する側ではなくて、相互に語り合っていくという関係が非常に重要であると思っています。町の中にそういう仲間を作っていく、その仲間づくりというのが、指導者養成になっていくのではないかと思います。一方では、専門家による指導が必要だけれども、日常的なことについては、専門家ではなくて、仲間の方が機能するのではないかと思っています。

最後に言われた、父親の意識啓発については、ちょっと言葉が足りなかったかもしれません。データがそうであるということであって、私も父親の意識啓発は非常に重要と考えますが、しかし、最初からそのプログラムだけやると、来る人は、意識啓発されたような人たち、既に終わった人たちが来るだけであって、必要な人たちは、やって来ない。そうすると、まず、行きたいと思える環境を作って、そこの中でお父さんも子どもに関われて面白いよねということを伝えていかなければならない。企業については、全く別の戦略で、かなり政策的なものを持ち込まないと、変化しないと思いますが、家庭の中については、逆に政策的なものは届けにくいわけで、こちらの方は、今のやり方ではないかと思っています。

赤西：おっしゃる通りで、共感、共鳴を求め、そしてそれに努力をして、上から目線で指導して躾を教えるようなことは、皆さんも嫌だろうし、私も嫌だし、誰もが嫌だと思います。こういったやり方では、頭打ちになり、行き止まると思います。どこから、突破口を開くかというと、例えば、我々が何かを発する時にそれはなぜそうなのかという説明責任があるということです。なぜそれを求めるのか、なぜそうしなければならないのか。これは、世の中の常識だからというのは、駄目だと思うのです。この説明責任においては、現場にいる先生たちが、いくらもノウハウを持っている。今テーマになっている、山縣先生がおっしゃったことも、なぜこのようなことになって、なぜ子育て支援が孤立した家族に必要なのかというと、1996 年以降に始まったエンゼルプラン、子育て支援によって、国が予算をつけて、待機児童対策をして、保育行政を充実させてきた、そのことで幼児教育のバランスは崩れました。幼稚園が保育園化する方向を向き始めてしまいました。でも、これは、流れの中でやってきたことなのですが、10 年前というと、10 歳の小学 4 年生が 10 年経つと 20 歳になります。今日、私のゼミ生が友達に子どもが生まれたと言いました。20 歳で子どもを産んで、保育園に預けて育てる人はいるわけです。ところが、この 96 年からこの 10 年間の間に、保育行政は、園を大きくする、待機児童を減らす、親の就労を支援するという方向となりましたので、あまり細かい躾の世界は、置き去りにしました。悪く言うと、園は親の言うことは何でも聞きましょう。自治体もそうです。自治体も少々の苦情は聞きましょう。そして、休日保育をしましょう。一次保育をしましょう。延長保育もしましょう。これもしましょうと膨らんできたこの 10 年です。10 歳の人が 20 歳でこの 10 年間親として、何をするべきかという訓練は圧倒的に足りないです。わかっていないです。だから、責めることはできません。これは、私たちに大きな責任があります。ということなので、そろそろ U ターンをしたいと思います。その方法は、現場で子どもを預かっている保育園、児童館の皆さん、先生方も含めて、子どもを真ん中において、きちんとなぜ必要なのかの説明責任を果たすことによって、一歩ずつ進んでいくと思います。これは、いくらでもノウハウがあります。それを皆さんに是非学んでほしいです。そして一緒に子育てをしながら、きちんと先輩が残

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

していった伝統をちゃんと伝えていくという工夫と努力をしてもらいたいと思いますので、皆さんがこれから先生となって出て行こうとする責任は、とても大きいです。時代をＵターンさせてほしいと考えています。

一色：ありがとうございました。本日のテーマの一番の主題は、地域の子育て支援ということで、具体的に先程数値を書いてもらいました。保育所、幼稚園に所属していない3歳未満の子どもと親、その家庭が80％弱というデータも出てきました。では、その人たちに対して、山縣先生からは、地域づくりということで、親族、地域、地縁、友人、仲間がうまく重なりあって、そこから出てくる具体的なネットワーク作りが必要だということでした。特に仲間、ピア、仲間作りがこれから伸びていくのではないかということでした。親とか仲間でない地域、その辺りも含めて考えないといけないと思いますが、山縣先生はどのようにお考えでしょうか。それから、今、赤西先生からお話がありましたが、地域の行政の在り方も含めてコメントをいただけますでしょうか。

山縣：一点目ですが、私はあまり楽観論ではなくて、仲間作りは、重要だけれども、相当意識をしなければ、行政がたくさんのメニューを持ってきていますから、どんどん依存してきてしまうと思います。ここらへんは、先程の赤西先生のお話に共通しています。自分たちでやろうという力は削がれていく可能性が高いし、今後もこのままどんどん削がれていくのではないかと思っています。そういう意味では、相当意識的にやっていかなければならない。保育園もサークル作りなどの支援をされていますが、一旦作ったものが、結局保育園に依存したり、大きくなった段階ですぐに解散してしまうという傾向が結構あります。

仲間は、同世代だけを意識しているのではなくて、地域の中でのいろいろな世代との仲間が一緒になるという仕掛け、これは、保育園、幼稚園の先生方は、必ずしも得意にしておられない。お母さんの仲間はそれなりの手法を持っていますが、地域そのものについての働きかけの仕方、コミュニティワーク、こういう手法を保育士、幼稚園教諭が身に付けていって、専門家になるという方法をとるのか、そういう専門家に逆に保育所に来てもらう、非常勤などで配置する。ここは、今、頭を悩ませているところで、何もかもを保育士さんにしてもらうのは、たいへんでしょうから、その辺りの仕掛けについては、少なくともコミュニティワーク的な手法が、今、保育園等に求められてきて、誰がするかという問題があるのではないかと思っています。

それから行政について言うと、私は一方で国の仕事を手伝いながら、一方で赤西先生の言われるようなことについて反省をしています。ニーズに応じていろいろな政策を作る度に、地域の力が衰えてくる。お金を出さずに地域に期待だけをさせてくるというやり方は、もう恐らく地域も保育園等も限界になってきている。もう一度その辺りは作り直し、ここ10年間やってきた政策の作り方とは違う、地域の人たちと一緒に考える政策作りをしなければ、勝手に大学の人がデータを出して、これが必要だ、やらない保育所は遅れているというようなやり方はもう終わったのではないかと思っています。

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

一色：もう一つ伺いたいのですが、赤西先生からご提案のありました、最近の親は親になるための訓練、別の言葉でいうと、親準備性が少し足りない。その準備性がないが故に、親の問題が出てきているのではないかというお話がありましたが、これについては、どうしたらいいのでしょうか。今、核家族になっていますから、準備性といっても、どのようにして、その部分を獲得できるのか。その辺りについては、何かお考えありましたらお願いします。

山縣：これは、先程、話をした中にありましたが、従来は、親の基礎能力、準備性は、家庭や親族や地域の中で当たり前のようにできていた部分があると思います。それは、見よう見真似、教えてもらうよりは、見る中で覚えていく。実際に子どもが生まれると、隣の人がちょっと気になれば声をかけてくれる。それは、指導ではなくて、こんなやり方もあるよという形も含めて、関わることができた。

今それができなくなっています。そうすると、それができる、そういう経験を持っている、今流の子育て経験を持っている人たちが親仲間だと思っていますので、親仲間による関わり、指導、支えの関係を作っていく必要があります。これが、今日一番言いたかったことです。保育園の保育士や心理士、保健師などは個々の分野のプロにすぎません。例えば保育士であれば、子どもの育ちに関してはプロだけれども、家庭の切り盛りについてはプロではありません。親はすべてしないといけませんから、パート毎に切り分けたプロ、スペシャリストではだめなのです。子育ては、スペシャリストを求めているわけではなくて、何でも屋さん、何でもそこそこできる人が親になっていくわけですから、そこそこできるのは、スペシャリストはあまり得意にしていないと思うのです。そこそこのやり方の一番のプロは、お母さんであると思います。子育てのパート部分のプロは誰ですかとなると、専門家になりますが、トータルでの専門家となるとお母さん、お父さんだというのが、私の持論です。

一色：赤西先生、今の山縣先生のお話に関係して、保育所は、今や地域の一つの拠点という言われ方もしています。保育所には、子育てのトータルなプロ、お母さんやお父さんもそこには、日常的にやってくるわけです。そういうところで、今、山縣先生がおっしゃったような子育ての輪とか親と専門家との交流などを通して、新しいチェーンができてくる可能性というのは、どうなのでしょうか。

赤西：まず、最初に保育所、保育園の要件で、おっしゃったように、保育所、保育園、幼稚園、その他の施設、認定子ども園、これは以前は総合子ども施設と言われていましたが、これらの施設は段々と垣根が低くなって、これらは所謂、乳幼児教育の枠の中に取り込まれて、あまり垣根が高くない時代が間もなくやってくると思います。ですから、今、先生が盛んに仲間作りをおっしゃっていて、学生にも話してくださいましたが、やはり、親のネットワークを作るというのは、山縣先生がおっしゃる通りに、子どもを持つ前の学生の皆さんの世代から考えていかねばならない。なぜか。特に保育園はそうですが、保育園で保育参観しますと、多くの保護者がとても興味を持って仕事を休んで来られます。その後に皆さんが久しぶりに会ったから、近くでお昼を一緒に食べましょうと言って、皆で集まって、とても楽しそうに昼食会をする。これが楽しみだそうです。保育園の保育参観もいいけれども、その後の昼食会も

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

楽しいと皆さんおっしゃいます。これが現実だと思います。私たちは、子どもを真ん中において、親とコミュニケーションをしたいと思っているのですが、親御さんたちが、自分たちの孤独なのか、ストレスなのかよくわかりませんが、いろいろな理由で、自分たちの楽しみとして別にサークルを持ちたい、仲間作りをしたいという意識傾向をとても強く感じます。特に都会に行けば行く程、それを強く感じます。その中で、やはり子どもを真ん中において、そのようなネットワークは基本的には、広げていきたいのが私の考え、それについては、子ども理解ができないと駄目です。例えば、今日授業で、赤ちゃんがなぜちょろちょろ動くのかということは、乳児の探索行動、知的好奇心があるからで、舐めて、叩いて、引っ張るのは、しなければならない行動。閉じ込めていたら世界がわからなくなって、孤独になって自分がわからなくなるという話をしましたが、子どもがなぜちょろちょろ動くのか、ハイハイの子どもがいろいろして、冷蔵庫の野菜室から鍵の束が出てくる。このようなことが日常的に起こる。すると子どもって、こういうのがかわいいなというのだけれども、やはり子どもは理由があってしています。子どもを真ん中において、その子どもをより理解して、子どもというものを皆で考えるというところから、ネットワークを作りたいと思うのですが、現実は、山縣先生がおっしゃった通りで、それ以前、ずっと前から、そのような意識を育てていかねばならないと思います。我々は現場の人間としては、どの辺りから取り組めばいいのか、保育参観の後の楽しい昼食会はひとつのステップなのかと考えています。

一色：ありがとうございました。山縣先生からは、学生の皆さん方といろいろなコミュニケーションをしたいと希望されていますので、ここからは学生からの質問などを聞いていきましょう。山縣先生から聞いていただいても結構です。

山縣：感想を聞いてみたいです。今日話を聞いて、何か意外だったということがありましたか。

学生 A：所属の表のところで、それ以外に所属している待機児童が多いことを知りました。

山縣：地域にいる子どもたちがたくさんいる。ここは、待機児童とは言わない方がいいです。ここは幼稚園に行く子どもたちがたくさんいますから、幼稚園に行くか、保育所に行くか決めていない、または、決めているけれどもその年齢に達していない子どもということでしょう。

学生 B：やはり、今は、親は自分の友達などとつながったりできていますが、やはりそれ以外の地域の方とか高齢者の方とのつながりがとても薄くなっていて、そこから学ぶことが少なくなっていることに気付き、やはりそれを全体的に結んでいくことは、とても大切だと思いました。

山縣：そこも強調したかったことです。そこは赤西先生がさらにもっといい話をしてくださいました。今の段階からと言われました。不安になった時に電話の向こうにだけしか相談相手がいないというのが、今の状況ですが、電話の向こうの相談相手は、非常に重要です。学生時代の仲間、それが別れていっ

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

ても支えになってくれます。たくさんの仲間、気の合う仲間だけだと同じ発想になってしまいます。いろいろな考え方、生き方が違う、そのような人たちとも常に付き合えるような人になってもらうといいなと思いました。

最後になりますが、子どもに対するメッセージを聞かせてください。

学生Ｃ：先程お話にもあった、昔のことを古い時代の高齢者の方から学んで、昔の日本のことと今の文化的な日本のこと、両方を学んでほしいです。

山縣：では、最後に大きな声で、皆で「子どもが好きだ」と言ってください。自分の子どもも他の子どもも皆好きになってください。思いっきり、天井に向かって言ってください。

一同：「子どもが好きだ」

一色：とても最後にインパクトの強いアクションで終わりました。では、ここで一旦休憩いたします。

【休憩】

一色：それでは、第二部を始めます。ここからは、地域から参加されている方、学生の方と一緒にフリーディスカッションで参りたいと思います。何か質問、ご意見ございましたら、伺わせていただきたいと思います。どなたかいらっしゃいますでしょうか。

一般Ａ：長年、障害児教育に携わって参りました者です。赤西先生のお話を伺っていて、非常に指導を受けていないというか、教えられていないというか、周りの様子が読めない親が多いということが分かりました。それを親に対して、私だったら、ついつい大声を出して怒鳴りたくなると思うのですが、赤西先生は、そういう時に大きな声を出すようなことがあるのでしょうか。

赤西：さすがに怒鳴ることは、なくなったのですが、難しいとは思います。私たちの時代は、洗濯機が珍しい時代の名残ですから、もちろんテレビは電気屋さんにしかありませんでした。本当にものがない時代で、我々は外で朝から夜までずっと遊んでいたのです。今はとても便利で、夜洗濯をしても朝になったら乾いているように設備も整っている。だから、工夫しなくても、そんなに頑張らなくても、これをして、次にこうしないといけないという段取りを整える必要もなくなってきました。だから、今までと同じにはいかないのではと思います。ですから、こうしなさい、それは駄目ですということを直接言えないです。やはり言う時は、それは子どもがどうだからと子どもを中心にして話をすることはできます。そういう時は、意外におじいさん、おばあさんの方がすんなりわかってくれる。「子どもの気持ちはこうなのだ。だからそう言っては、いけない」と言うと、「そうですよね。子どもも小さいながら考えていま

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

すからね」と、結構お年寄りが引き取ってくださいます。だから、そのようなことから少しずつと考えています。

一色：他にいらっしゃいますでしょうか。

一般 B：私も赤西先生と同じで、結論から言いますと親の無学。結局は、サーキュレーション、プロローグとエピローグが一緒。パソコンでいろいろ仲間同士でコミュニケーションをとったとしても、結局は何もわかっていないと思うのですが、どうでしょうか。

赤西：実態を伴いにくいというのもありますが、ただ、かばうようですが、若い人の責任がどこまであるのかというのは、我々大人に責任があるかと思います。だから、今の若い人はとよくおっしゃいますが、それでもそうしてしまったのは、我々大人の世代だからとどうもそこは譲れないところがあるので、その中で工夫してやっていくしかないかと思います。

山縣：私も基本的には、同じような考え方です。例えば、挨拶をする。これは、我々にとっては、当たり前のことなのですが、では、家の中で挨拶をしていますか。朝起きて、おはようと言ってるかと聞くと、まず家族と出会わない家があります。家族の中で挨拶をすること自体が成り立っていない。寝ているお父さんを起こしてはいけないとか、昔だったら、お父さんがテレビをつけたら、皆がなんとなく横で面白くなくてもテレビを見ないといけないような雰囲気でしたが、でも家の中がそうなっていない。そういう形で育ってきた人たちに、突然「大人はね」というのを持ちこんでも、難しいのではないか。今イメージしておられるような人間像を作るためには、どうすればいいのか、もう一度考え直さないといけない。単に怒るべきだ、やるべきだというべき論だけでは、今の若い人は、中々ついて来てくれないという感じはします。

今日、前半は動きまわって汗だくになって講演しておりましたが、今の私のような大学の講義のやり方は、先輩の方から見られたら、何をしているのだと、学生は小学生ではないと思われるかもしれません。でも、恐らく、私がここに座ってパワーポイントだけを見せていたら、数割は寝ていたと思います。それは、寝ている学生が悪いのか、寝るような講義をしている私たちが悪いのかということです。私は、教員自身がもっと努力をすべきだという考え方をしています。私のようなタイプの人間は、少数派です。「学生に迎合したやり方は、大学らしくない」「大学はわからない話でもすることに意味がある。いつかはわかるのだ」と言われる先生がいらっしゃいますが、私は、それは学生に失礼で、いかに学生に分かってもらうか。そのためには、どうパフォーマンスをするか。

それがうまくいくかどうかは別にして、今の人たちに分かってもらうためには、どういう手法を用いないといけないのか。従来の手法を使うだけでは、中々通じない社会になっているのは、大学の教育の中でも、実感します。だから、私は、学生さんに迎合してもいいから、10 分でもいいから分かってもらう。そして、分かったことを確認する。それが若干ピント外れでも褒める。そうすると、発言していい

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

のだと思ってもらえるような気がします。間違っていて、責められるともう喋りたくなくなる。やがて行きたくなくなると感じますので、いかに来てもらうか、来てもらわなければ通じない、そのためには、少々間違っていても当たっている、でもこういう考え方もあるよという自分の言いたいことを補足していくというやり方を繰り返しています。その辺りが、今日のやり方でも、お父さん、お母さんに向かう時の姿勢として共通していると思います。

赤西：「やらせ」という言葉は、80 年代頃、学級崩壊を起こした時に大学の中から非常に分かりやすい言葉で出てきました。学生たちがやらせにへきへきしている。いい加減にしてほしい。私たちはロボットとは違うという考えでしょう。それから、学校改革が行われて、少し収まってきましたが、やはりまだ、建前と本音で、特に今日は、山縣先生がおっしゃいましたが、学生は、授業の一環ですし、座席指定にもなっていましたから、一番前から座っていて、これは、一つの作戦だなと思って見ていましたが、皆、これは、心得ているのです。これは、建前で、そして本音はこうだ。そして、これがあまりにも解離してしまうと、おかしくはなるのですが、上手にこれを使い分けて、これは世の中に馴染んでいくという意味では大事ですが、どうもこれが、また固定化してしまっている。先程、先生が挨拶のことをおっしゃいましたが、中学２年生のトライアルウィークで挨拶ができないので、校長先生が教えて欲しいとのことですが、これは変な話で、保育園、幼稚園、小学校と３千回は挨拶しています。この３千回は一体何だったのだ。このようなことを考えてみると、子どももよく分かっていて、これは、言っておかなければいけないものだみたいなものなのでしょう。では、本音がどこにあるのか。本音を引き出すために、先程、山縣先生は走り回り、大活躍されて、寝ている学生はいなくて、皆楽しそうにいい意味で生き生きと受講していました。私も、手前のことですが、やはり寝る学生は、殆どおりません。私の場合は、現場の今日の学生の身近な話を徹底してしますので、学生にしてみれば、面白いと思って聞くのだと思います。我々大人も、建前と本音を使い分けないといけないのですが、いざ大事なところでは、本音をきちんと見せてあげて、あなたのことを考えているのですよということをきちんと感じさせてあげないといけないと思っているところです。

一色：他、いらっしゃいますでしょうか。

学生 D：総合子ども学科３年生の学生です。今日は、貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。先程、山縣先生が言われた、大学の授業のことですが、寝ている学生がいるのをみて、学生の一人として、恥ずかしく思うところがあるとともに残念であることは、毎回感じます。先生が工夫されていた面白いからこの授業を受けてみようと持っていく前に、もう一つ、聞く側の私からですが、資格のため、これから私たちがしようと思っていることは、どういうことなのかということを、自分で考えてからこの場に来ないといけないと思うのですが、そういうことをイメージさせてあげるような一声があればきっと目を覚ます学生は、少し増えると思います。そしてそれは、赤西先生が言われていた、よい指導者を立ててというところにつながると思うのですが、まず、子どものことを中心にして、親と向か

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

い合いたいという指導者と同じことで、ここであれば、就学前の子どものことを思い浮かべてこの講義に臨んでほしいということと同じような感じであると思いました。

他、この講義を受けて思ったことは、母親を手助けしないといけないような世の中になってきたのは、今、ワイドショーなどを見ていても、お母さんが今困っていることは何ですかとマイクを向けられていることがとても多いのですが、そこで、こうして欲しいと言っているので、赤西先生が言われた自己主張はできているとは思いますが、母親を甘やかすということとはまた別ではないかと思いました。ただ、制度を整えて、手助けばかりするのではなく、それは、いつか甘やかしになるのではないかと思ったので、少し怖く感じました。私は、小学校教諭を目指しているので、そのような甘やかすという手助けは止めていける先生になりたいと思いました。そして、地域社会というのを作って、子ども親の親子関係というその育てる、育つという図を書かれた時に、①母、②妻･主婦、③女と描かれた図で、そこできっと括弧書きで男性のことも描かれていたとは思うのですが、そこで、括弧書きではなく、母親の隣りには、父親、妻の隣には夫とか、主婦と主夫、女のところには、男と描いていただけると、子育てにおける女性側の男性蔑視の意識を変えることができるのではないかと思いました。男性は、どうせ、介入してくれないなどという考えをよく耳にしますが、そのような女性側の意識付けからしても、一番が母ではなく、①母・父と描くことで、男性も対等な位置にくるべきものであると、女性側からも考えられるようになればいいと思いました。

山縣：しっかり聞いてくれてどうもありがとうございます。４つのことを簡潔にお話したいと思います。最初に言われた資格の話ですが、ここはいろいろと立場があると思うのです。私は、大学は専門学校ではないと思っています。すべてが資格を取って卒業するのがいいとは必ずしも思っていません。私は社会福祉士養成のところにおりますから、気持ちとしては、社会福祉士になって欲しいと思いますが、大学ではもう少し広い勉強の仕方があるという立場ですから、資格を取りたい人には、丁寧にお話する前提です。今日はきっといろいろな人がいて、中には、資格を取りたくない人もいるのではないかと思ったので、その辺りは、あまり強調しなかった部分があるかもしれません。

２点目ですが、甘やかしの関連は、赤西先生も同じようなことを言われていたと思います。私は甘やかすことを奨励しているのではなくて、入口として受け止めてあげないといけないというそこが甘やかしの連続のところで終わっている政策がある、ここをどう変えるかがポイントであると思います。そこに関連していまして、私がやっているみなくるハウスというのは、支援をしない支援というのをスローガンにしています。拠点に来てもらって、そこに仲間がいて、自分たちで支えあわないといけない。安定的に使える場所が親子にはあまりありませんから、そういう場所を提供するのが支援であって、そこで何かの事業をするということは、年数回しかしません。季節の行事ぐらいです。後は基本的に何もしません。ただ座っている管理人のような人がいるだけで、片付けるのも、おもちゃを出すのも全部自分たちでやって、壁には、「事故が起こってもあなたの責任です」と書いてある。自分たちが主体であるということを基本的なスローガンにしている。しかし、依存型の方がやってきます。そういう人は、何回か来ると、何もしてくれない所と思って来なくなります。だから、私たちの支援は、決してうまくいっているとは思

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

いません。でもここでやり続けると、どんどんスタッフが必要になって、手に負えなくなる。自分たちで解決していく、怪我があっても、事故が起こっても、親同士の話合いは、自分たちでやってくださいという形です。

３点目ですが、私の話の中で時間がなくて言えなかったのですが、今、国に対して厚生労働省に調査の仕方を変えて欲しいと言っています。今、国は、「子育ては、楽しいですか、つらいですか」という聞き方の調査票で出してきます。これは、私の実感で言うと、一本の軸でとらえるのはおかしい。少なくとも、最低２つの軸でとらえる必要があると言っています。「楽しい VS 楽しくない」、「つらい VS つらくない」という２つの軸です。すると、「楽しい＋つらい」（普通の子育て）、「楽しい＋つらくない」（いきいき子育て）、「楽しくない＋つらくない」（淡々子育て）、「楽しくない＋つらい」（逃げたい子育て）、という枠組みができます。

この２つの軸をとるだけで、関わり方が違っていると思います。「楽しいところも、つらいこともある」というのが人間の暮らしではないか。問題は、「楽しくない＋つらい」（逃げたい子育て）状況にある人に対して、集中的なケア、支援がいることです。「楽しい＋つらくない」（いきいき子育て）層には、「楽しくてよかったね」と言ってあげればいい。

こう分けるだけでも、親子に対する見方が相当違ってくると思っています。そしてそれぞれの枠に対してどうのような支援が必要かということ考えていくと、例えば、「楽しくない＋つらい」（逃げたい子育て）を地域に任せると危険度が高くなる。「楽しい＋つらい」（普通の子育て）や「楽しくない＋つらくない」（淡々子育て）は地域でできる。「楽しい＋つらくない」（いきいき子育て）は、仲間うちだけでもできる。

軸を２つにするだけで、いろいろな親子の見え方がしてくるはずなので、このような支援のやり方はどうでしょうということを国に提案しています。

最後に、アンパンマンの話ですが、言葉で補足したつもりでしたが、私はお母さんたちに話をすることが多いので、敢えてお母さんのつらさを共有してあげようというので書いていて、本当は括弧の中にあるものが私が言いたいことです。親であり、家事をしなければならなくて、一人の人間である。ここを父と一緒に書いてはどうですかという提案でしたが、私はそのような区分さえいらないのではないかと思います。人間というだけでいいのではないか。親というだけでいいのではないかと個人的には思っています。

学生Ｄ：あの図を見て、手助けが甘やかしになってはいけないなど、これも一つの凝り固まった考えであることが自覚できました。ありがとうございました。

一色：他の方でコメントなどございますか。

一般Ｃ：今日は、どうもありがとうございました。父親の育児参加に関する意識啓発というのが、とてもパーセントが少なかった。それは、母親は父親はどうでもいいと思っている意識があるのではないかと思っています。しかし、やはり父親がしっかりしないと本当にいい子どもが育つとは思えないので

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

す。一番都合がいいのは、遊びから入るのがいいのではないかと思います。例えば、今は、危ないということで、竹馬などに乗る人はいません。私は竹馬を自分で作り、最初は、竹を持って歩いていく。段々と手を離して一人で歩かせるということで、それは非常にバランスの教育になるわけです。そしてまた、こけるのもいいと思います。こけてもうまくこけて、あまり怪我をしないです。それを恐れてしないというのは、おかしいと思います。そのこけるということも自分で自覚することが大切だと思います。また、竹トンボなども作らせます。ナイフで作りますが、今はナイフを使う人がいないと言われていますが、実際は、ナイフを使えるぐらいの手の器用さがないと後々苦労するのではないかと思います。だから、小さいころから使わせて、もっと教えなければいけないと思います。その時に、手を切るのもいいと思います。手を切るということは、自分が痛いということが身を持ってわかるわけです。痛みというものを、本当に実感して知るということも大切なことだと思います。そういうことを通じて遊びと一緒に愉快に教えていくというのが、本当にいい教育ではないかと思います。今はコンピュータが流行って、ゲーム機で遊ぶ子どもが多いですが、それでは、偏った人間になるのではないかと心配しています。

山縣：私は基本的には、山奥で育ったものですから、非常に共感するところがあります。私の市民型の活動のところでも、事故はあなたの責任といいました。大きな怪我とか事故の最大の予防策は、小さな怪我や事故を積み重ねることで、その積み重ねが危険度の察知をしていくのだということが持論なのですが、保育園ではそれが言えません。小さな事故はＯＫですよとは言えません。その辺りの現場のお話は赤西先生にしていただいた方がいいと思います。

赤西：我々の子どもの頃には、折りたたみのナイフがあり、それで刀を作ったりして遊びましたが、今そのようなナイフを見ることも少なくなりました。そういう意味で、貧しくても豊かな経験ができる時代だったと思います。そこに今おっしゃった父親の役割、そのようなことは、男性の遊びにつながりますので、それをまた、子どもたちが見て、違った経験を父親から受ける機会があったのだろうと思います。今はお父さんに子どもと遊んであげないといけないというと、大体はアミューズメントに連れていくとか、どこか買い物に行って、アイスクリームを食べさせるなどです。手をつないで、網を持ってバケツを持って、何も捕れなくてもその辺りをうろうろするだけでも十分遊びになるという、この発想が根付いていないところがあって、お父さん自身も、そのような経験がなくて、おじいさんに教えてもらっていないという連鎖が起こっています。怪我のことは、皆さんおっしゃるように今は、厳しいです。怪我に関していうと、都会に行けば行くほど、すぐに訴訟になります。あっさりと弁護士と相談しますとおっしゃいますので、コミュニケーションする糸口がない。やった子どもが悪くて、やられた子どもは悪くないけれども、我々教育側から見ると、やられた子どもにもそれなりの理由があって、次に大きな怪我を出さないために、どんな予防とコミュニケーションをしておかないといけないのか。自分の我が子をより深く見つめるいい機会なのですが、それよりも怪我をした、されたことをどう保障するのか、謝るのか謝らないのかという方へすっと流れてしまうというのが、我々も苦しい現実です。ここは、何としても踏ん張ってそうでないということを言い続けていますが、モンスターペアレントという嫌な言葉があります。夜中の

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

１時、２時でも収まらない親御さんはいらっしゃいます。だから、先生が疲弊して壊れてしまわないように、どこかで折り合いをつけますが、難しくなっています。

一色：そろそろ時間となりますが、どなたかございますか。

一般Ｄ：今日は、仕事でこちらに伺いました。今1歳の子どもを育てている一母親の立場としてお話させていただきます。いろいろお話を伺って、確かに、いろいろな支援があるといろいろなサービスをたくさん受け過ぎて、母親の力が弱まるというか、どこかに助けてもらってというので、甘やかすというのは、確かにあると思うのですが、実際、自分が子どもを育ててみて、その家庭の状況や子どもの性格にもよると思いますが、例えばお父さんが、殆ど家に帰ってくるのが遅いとなった場合、昼間ずっとお母さんと子どもと二人っきりというのは、本当にたいへんだと思います。ずっと外に出ることがなかったら、精神的にも体力的にもとても疲れてくると思います。そのような母親には、山縣先生がおっしゃっていたような支援をしない支援があるということを周知されるととてもいいなと思いましたが、一歳児検診などの時にこのような集まりがあるなど伝えてもらえたら、一度そのようなことで足を運んで、そこから輪が広がっていくので、そういうのがあればいいのではないかと思います。関心がある人は、一歩をどんどん踏み出して関係が作れていくと思うのですが、中々知らない人が閉じこもってしまう。外の地域の人とつながるきっかけがなくなってしまうと思うので、できるだけ多くの方に、そうような情報を知ってもらう機会があればいいなと思いました。母親が一番子どもにとってプロというのが、母親にとっては、嬉しいというか救いの言葉だなと思います。私も保育園に預けていますが、モンスターペアレントの話がありましたが、そのような情報があるので、保育園の先生に質問するのも、ちょっとしつこく聞くのも悪いかなと気を遣ってしまいます。これを文句を言っているように思われてもいけないから、ここはちょっと聞くのは止めておこうということもありますし、怪我でも、インターネットなどで調べて、余計に不安になる母親もいるようなので、その辺りで、母親が一番のプロなのだから、自信を持って伝えて、そして自信を持たせて地域に出てきてもらった、そういう場でコミュニケーションがとれた上で、躾、母親としての高いヒールは危ないねということを言ってもらえたら、聞いてくれるのではないかと思いました。

山縣：おっしゃった通り、専門家というのは、不安とか問題を探して、そこに対応する人たちだと思います。親というのは、安心材料を探して育てるのが本来の仕事です。結局、今不安型の方に巻き込まれてつらくなってきている。最近よく話すのが、離乳食は虫歯をつくるのかというのをやっていて、昔の人は、くちゃくちゃと噛んで与えていました。あれは、若いお母さんは絶対に駄目です。あれをすると虫歯がうつると言われます。ついに最近お父さんがかわいいねと赤ちゃんにキスをすると、虫歯がうつるというのです。これは、たいへんな社会だというのが、私の感想です。そのあたりに、専門家がもたらした弊害が相当ある。そのことを専門家は未だ気付いていない。自分たちが子育ての混乱をもたらせているという部分が相当あるのではないかと思っています。

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

赤西：これは、苦情になるかもしれないから言えないということはおっしゃる通りで、そのようにデリケートな気働きのできる親御さんばかりだったら、とても私たちはやり易いのだけれども、中々勢いのある人にどうしても難しい人から対応をするというのが、世の中の常で、簡単ではありません。やはり、聞くべきことは聞かねばならずで、我々にもたくさんの見落としがありますので、そのことをきちんと話合いたいと思うのですが、これは、例えば保育園とか幼稚園とか施設そのものが、親との関係性をどういうふうな位置づけでしているか。例えば二つに置き換えてみて、一つは、保育園であるならば、子どものお世話に関して、どれだけきちんとやり終えているかが保育園の価値基準になる。親との信頼関係になる。例えばおむつかぶれを無くすために、1日2回はシャワーをさせるということも大事です。二つ目は、子どもさんはこう思っていますよ、子どもさんは本当はこれを嫌がっていますよと子どもの気持ちを中心に考えているか。この園のスタンスによって、全然違ってくると思います。子どもの世話を中心に考えているところでは、やはり、何かおっしゃることが苦情に置き換えられてしまうことは、あるとは思います。でも、今日ズボンが汚れているのですが、敢えてそのままにしておきました。なぜなら、お母さんに帰って、今日滑り台で楽しかったことをお話するのだと言って、これも見せたいと言っていた。子どもさんの気持ちを大事にしたら、着替えさせた方がいいかと思ったけれども、そのままにしておきましたと言って、子どもの気持ちを一番に考えてくれる。そういった園もあります。そういうところでは、割とコミュニケーションがしやすいと思います。でも、概ね、子どもの世話中心が、保育園の仕事になってしまっています。ですから、何か言うと苦情めいて、そのようなつもりではないのに言えないと後ろ向きの気持ちが出てきます。だから、園、担任の先生が、どんな風に思って子どもを育ててくださっているのか、そのことによって言い易い場合も出てきますので、そんなことからお話をされたら、コミュニケーションができると思います。

一色：今日は、お忙しい中、おいでいただきありがとうございました。今日の子ども学講演会は、私から見ても子ども学講演会の本質、基本というのを再確認できた場ではなかったかと思います。それは、子どもの問題を視点を変えるというお話もありましたが、やはり多角的に総合的にきちんと見ていかないといけないという点、それから、地域との連携、これが非常に子ども学講演会にとっても意味があるという点、そして、子どもを真ん中にして、育つ、育てる、育む、こういったことを子ども学講演会で、これからも考えていきたいと思いました。

今日は、どうもありがとうございました。

Copyright (c) 2010,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.